

喬旦加布

1. 事業実施の目的

ノルウェーのベルゲン大学で開催された第 14 回国際チベット学会「14th Seminar of the International Association for Tibetan Studies」での研究発表

2. 実施場所

ノルウェー国 ベルゲン大学

3. 実施期日

平成 28 年 6 月 18 日（日）から 6 月 25 日（金）

4. 成果報告

●事業の概要

私は、総研大の地域文化学専攻の学生派遣事業の支援を受け、2016 年 6 月 18 日から 6 月 25 日にかけてノルウェーのベルゲン大学において開催された第 14 回国際チベット学研究学会「14th Seminar of the International Association for Tibetan Studies」に参加した。本学会発表を通して申請者の研究をさらに発展させると共に、ベルゲン大学でのチベット研究に関する文献収集を行い、申請者のチベット研究の更なる発展に努めることができた。私にとってこの学会に参加したのは今回で 2 回目であるが、このたびは初めてヨーロッパでの異文化を体験することができた。

一週間あまりの間に 36 カ国から 460 人あまりのチベット学研究者が集合し、チベット仏教学および言語学、哲学、歴史学、文学、社会学、人類学など多岐にわたって学術的交流を行った。この学会は通常 3 年に一回、開催地を移動しつつ開かれている。今回はノルウェーのオスロ大学とベルゲン大学の共同主催でベルゲン大学にて開催された。大学関係者の話によると「ノルウェーの政府と大学の教育機関はチベットとの関わりが深く、これまでチベット本土から留学生 100 人余りを受け入れ、奨学金などの面で支援を行った。その中で、自然科学と人文社会学などの分野から 10 人あまりの留学生が既に博士号を取得し、帰国後、各分野で活躍している」と述べている。

学会は実質 5 日間に渡って行なわれ、使用言語は主に英語とチベット語であった。11 の部会場に別れて約 400 以上の研究発表があった。

今回、私が参加したセッションは **History of local groups in Amdo** であり、私はチベット語で「レプコンウォッコル村の歴史をめぐる考察」というテーマで発表を行った。本テーマは、申請者の博士論文の一部である。アムド・レプコン地域に属するウォッコル村の人々の祖先の由来などについて、「ツムバ部族」と「ドルド」という名称の分析から始め、「ホンボ」というウォッコル村の歴代首領の伝記と地方史料を参照して発表内容を構成した。



写真1 オープニングのセッション



写真2 申請者のセッション

●学会発表について

発表要旨

本発表での研究テーマは、「レプコンウォッコル村の歴史をめぐる考察」である。アムド・レプコン地域に属するウォッコル村の人々は、自らがチベット族であるというアイデンティティが強く、日常生活様式も周辺のチベット族と変わらない。彼らの母語は、中世モンゴル語に由来するといわれる言語で、現在はトゥ（土）語と分類されている。チベット語を母語としない彼らは、周辺のチベット族からは「ドルド（トゥ族）」と呼ばれている。1950年代に行われた中華人民共和国民族識別工作で、トゥ（土）族として登録された人々は、ウォッコル村と同県の年都呼郷のニェントフ村及びガセル村、ゴマル村、隆務鎮のツァンゲション村とジャツァンマ村の「ドルド」の人々、その他に青海省互助県と楽都県、大通県、甘肅省などに点在している人々である。しかし、同仁県のトゥ族と青海省の別の県に点在しているトゥ族の言葉は、30%しか共通していないとされており、彼らの間に中国の民族識別の4つの基準の1つとされている同一のアイデンティティの感覚は存在しない。更に、同じく同仁県県内のトゥ族村の中でもルロ祭などの伝統的行事を行う際、ウォッコル村は「マパ7つのチベット族村」と捉えられているが、他のトゥ族村は「ジャセゼシュ（漢4屯あるいは四寨子）村」として捉えられてきた。

以上を踏まえ、私がこれまで行ってきた先行研究の整理、並びにフィールド調査の民族データを分析し、歴史的にチベット族・トゥ（土）族・漢族・モンゴル族などの接触及び雑居、言葉の変容などについて考察した研究成果を発表した。また、国際チベット学会での発表の機会を利用し、開催大学であるベルゲン大学の図書館にて、ヨーロッパにおけるチベット研究に関する文献資料収集も行った。

●本事業の実施によって得られた成果

今回の国際チベット学会を通して日本のみならず、世界的各国の大学や研究所におけるチベット仏教学や哲学、言語学、歴史学などチベット学の最先端の研究者らの発表を聴き、非常に良い勉強になった。研究発表だけではなく、会場外の交流も大変意味深く、研究者らと深く交流もできた。

私の今回の発表は、今後の博士論文の執筆にあたって、重要な一部であり、今回の発表を通して仏教学者や歴史学者などの分野を超えて、第一線の諸チベット学研究者から良いアドバイスとコメントを得た。これらの知識を今後の研究に活かしたい。例えば、チベットの歴史研究者で有名な「北京中国蔵学研究中心」の周華先生からワォッコル村の祖先の由来について「ツムバ部族」だけに限定せず、今後「ドルド」についても古文書を調べたら良いのではないか？というアドバイスをもらった。また、青海民族大学のチャガ・テンジョン先生らからも敦煌文献で「ドルド」についての記述があるかどうか？あるとしたら、祖先が中央チベットからやって来たという仮説が十分に成立するという意見があった。他の先生らから全体的研究発表について、よく準備できているという好評を得た。

●本事業について

フィールド調査を重視する文化人類学を専攻する大学院生にとって非常に有益な事業であり、今後とも本事業が継続されるよう心よりお願い申し上げます。